

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520462

研究課題名（和文） 内容類型学からみた奄美諸方言

研究課題名（英文） The Amami Dialects Analyzed from the Viewpoint
of Contentive Typology

研究代表者

田畑 千秋（TABATA CHIAKI）

大分大学・教育福祉科学部・教授

研究者番号：60264321

研究成果の概要（和文）：ゲ・ア・クリモフの提唱した Contentive Typology（内容類型学）の視座から奄美諸方言を再調査、再検討した。その結果、かつて岩倉市郎が『喜界島方言集』で記録した現象や存在をあらわす文の主格的な Nφ 形を再確認した。これによって奄美諸方言に「活格」現象があった可能性が大きくなった。主な調査地は奄美大島・喜界島・徳之島の諸集落である。

研究成果の概要（英文）：I reexamined the Amami dialects from the viewpoint of contentive typology. As a result, I renewed my appreciation of the nominative-case-like Nφ form of the sentences, whose existence as a language phenomenon is listed in Ichiro Iwakura's *A Collection of the Kikaijima Dialects*; and thereby found out that the "active case" phenomenon's existence in the Amami dialects was highly probable. The research was conducted mainly in the villages on Amamioshima, Kikaijima and Tokunoshima.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、危機・少数言語

キーワード：クリモフ・内容類型学・活格現象・主語述語補語・危機言語・奄美諸方言

1. 研究開始当初の背景

(1) 内容類型学 (contentive typology) とは、ゲ・ア・クリモフ 1977 (石田修一訳・1999) 『新しい言語類型学－活格構造言語とは何か』(三省堂) を代表的な著作とし、旧ソビエト連邦の言語類型学の成果をうけつぐ、語彙、文法 (形態論・統語論) にわたる、言語

の意味＝内容面を全体としてとりあげつつ研究する言語研究の流れの一つである。内容類型学によってほりおこされた活格タイプ active type については 2007 年 6 月日本言語学会春季大会において「活格性とは何か」のテーマのもとに危機言語小委員会ワークショップでとりあげられ、クリモフの発表後 30

年を経て、日本の言語学会でも一般に認知される方向へと進んできたといえるだろう。

(2) 研究協力者（申請時研究代表者）松本泰丈は 1982「琉球方言の主格表現の問題点」（『国文学解釈と鑑賞』607、至文堂。のち松本 2006『連語論と統語論』至文堂に）で、クリモフの研究に教えられて奄美諸島の喜界島方言に活格タイプ性が認められる現象が存在することを指摘したが、方言研究界ではとりあげられず、言語学のほうでも活格タイプ性が広く理解されていなかった当時は、既成の分裂能格タイプ性にひきつけて解釈されたりしたようである。

(3) 松本はその後にも活格（松本の当時の用語だと「シテ格」）という用語はおもてに出さなかったものの、1990「〈能格〉現象と日本語」（『国文学解釈と鑑賞』704、至文堂。のち『連語論と統語論』、至文堂に）、1991「琉球方言と中国語」（『東方』123、東方書店、のち『連語論と統語論』、至文堂に）、1993「名詞の〈主体＝客体〉の用法と問題点」（仁田義雄編『日本語の格をめぐる』くろしお出版）、2005「マークされない名詞のかたちをめぐる」（『国語と国文学』974、至文堂）などで、奄美諸方言に例をとり、直接間接に活格タイプ性とのかかわりをみせる文法現象を、あれこれとりあげた。

(4) 研究代表者（申請時研究分担者）田畑千秋は、約百年前の奄美歌謡を内容類型学的視座から研究し、2007「奄美ウタ言葉の中の主格用法としてのN ϕ 形」（『国文学解釈と鑑賞』908、至文堂）において、近世期の奄美歌謡の中に、活格構造がみられることを指摘した。また、研究代表者は、2007「奄美大島名音方言の二格相当格（1）(2)」（『国文学解釈と鑑賞』914・920、至文堂）において、奄美大島のハナシコトバの中の格標識を精査し、ヲ格相当のN ϕ 形と二格相当格を抽出し、補語としてのN ϕ 形の問題を提示した。

2. 研究の目的

(1) 上記研究開始当初の背景から出発し、奄美諸方言の文法現象を内容類型学の観点からとらえなおし、それによってこれまでの研究に欠落していた側面をあらためて点検していこうとするものである。

(2) 具体的には、いわゆる「危機言語」として各方面からの調査の急がれる奄美諸方言（奄美語）にあらわれる活格現象を問題にする。

活格～能格現象をめぐる中国語との対照もあらためて検討していく。

(3) 収集した資料は、類型学や文法のためにだけでなく、というよりむしろ内容類型学の言語の音声面とのかかわり（クリモフもまだわずかに言及しているだけである）を今後考究していくためにも、音声的にも正確な文字

化が、求められる。

(4) さきにも述べたように、内容類型学～活格性のとりだしは、これまで断片的な指摘はあるものの、体系づけられたのは 20 世紀末という、まだ若い研究分野である。また、日本語に関して活格現象を指摘する立場も、今のところめだっているとはいえない。さらにこの現象の考察をふかめて、次世代の研究者に残したい。それによって、奄美諸方言だけでなく、古代日本語を含めた日本語全体の記述も、いっそう深まることが期待される。

(5) 前述の「琉球方言の主格表現の問題点」（1982、松本）、「奄美ウタ言葉の中の主格用法としてのN ϕ 形」（2007、田畑）は、いずれも文献資料にもとづいた研究であったが、今回のこの研究は奄美諸方言のハナシコトバによるなまの資料を収集、分析、研究していく。ただ、この作業は、文献資料と異なり、生きたコトバゆえのあつかいにくさがある。予想される問題点として、活格性をささえるべき格形にゆれが生じうることが考えられる。そのなかにはハナシコトバゆえの「誤法」といったほうがよさそうな場合もあるかもしれない。幸い研究代表者は奄美出身なので、このことに関しては **native speaker** の言語感覚を活用することも可能である。それとともに、内容類型学～活格現象の将来の研究のためにも、できるかぎり多量のデータを、そらえられるうちにそろえていくことが、理論的な考察をすすめていくのと同程度以上に重要である。このように、内容類型学～活格現象にかかわる現象をほりおこして、「危機言語」のこれまで注目されてこなかった諸側面を記録しておくことは、将来の言語研究にとっても意義あるものとなるであろう。

3. 研究の方法

(1) 内容類型学の理論を深く学び、その理論を展開させ、発展させる（理論研究）。

(2) これまで研究協力者（松本）が喜界島阿伝方言についてその存在を指摘した活格現象とその痕跡を奄美諸方言全般にわたって広くさぐっていくために、奄美諸島諸地点の方言の話し手の談話資料を収集・記録し、内容類型学的な観点から分析・検討する（理論と個別のすりあわせ）。

(3) 研究代表者、研究協力者で、これまでの調査、報告の相互点検をおこない、たりなかったところ、まちがったところをみつけだし、今後のよりよき調査の指針とする（調査のあり方）。

(4) 直接現地におもむき、伝統的奄美語の使い手から話しことばを調査する。2009 年度はおもに喜界島・奄美大島を調査。2010 年度はおもに本土在住奄美出身者を調査。2011 年度はおもに徳之島を調査（現地調査）。

(5) 調査・収集した資料にもとづき。当該各方

言の文法を体系的にまとめ、内容類型学的な特徴をとりだしていく（文法の体系化）。

(6)文法的記述を含めて内容類型学的な全体像を文章化していく（体系的文法記述）。

(7)類型学研究会などの関係諸学会で成果を発表し、多くの研究者達と問題意識を共有するとともに、批評も受け、理論言語学と個別言語学の相互にわたる問題を考える（学会発表と批評）。

(8)調査と研究の成果を公刊し、言語学、国語学、方言学の諸学会および研究者に届ける。また、奄美諸島だけでなく沖縄諸島・宮古諸島・八重山諸島の図書館、教育委員会、公民館にも届ける。また、地元の研究者をはじめ関心のある方々にも届けて批評を受ける。（研究書の公刊）。

(9)研究代表者と研究協力者は、奄美諸島において、このプロジェクト研究の成果を講演等のかたちをとって発表する（成果の地元還元）。

4. 研究成果

(1)2009 年度

①奄美諸方言に関する研究書・報告書、および内容類型学に関する論文等の読みあわせをおこなうとともに、研究代表者（田畑千秋）と研究協力者（松本泰丈）のこれまでの調査、報告、研究を相互点検して、現地調査の準備とした。

②類型学研究会（京都大学）に出席し、理論的研鑽をふかめ、研究会メンバーと意見交換をした。またこれまでの研究を整理して、研究代表者（田畑）が、当該研究会で2回の研究発表をおこなった。発表題目は「奄美大島名瀬方言の主語と述語、そして補語」(1)・(2)、である。

③研究代表者（田畑）は、奄美大島と徳之島において、危機言語といわれる奄美諸方言の大切さを説き、奄美の人々と意見交換をした。そして、当該研究課題と関係が深い講演を奄美大島と徳之島でおこなった。

④研究協力者（松本）は、東京外国語大学日本課程、白馬日本語研究会、海山言語研究会において当該研究課題と関係が深い研究発表をおこなった（学会発表参照）。

⑤研究代表者（田畑）と研究協力者（松本）は、奄美諸方言を喜界島と奄美大島で調査、内容類型学的観点からとらえなおして、活格現象にかかわる側面をほりおこした。主な調査地は、喜界島（荒木集落、上嘉鉄集落、阿伝集落他）、奄美大島（川上集落、和野集落、戸円集落、蘇刈集落他）である。

(2)2010 年度

①奄美諸方言に関する研究書・報告書、および内容類型学に関する論文等の読みあわせをおこなうとともに、研究代表者（田畑千秋）と研究協力者（松本泰丈）のこれまでの調査、

報告、研究を相互点検して、現地調査の準備とした。

②研究代表者（田畑千秋）と研究協力者（松本泰丈）は、類型学研究会（於：京都大）に出席、理論的研鑽をふかめ、研究会メンバーと意見交換をした。

③研究代表者（田畑千秋）と研究協力者（松本泰丈）は、月末金曜日の会（於：同志社大）に出席し、研鑽をふかめ、研究会メンバーと意見交換をした。

④研究協力者（松本泰丈）は、喜界島および奄美大島を内容類型学的視座から調査した。

⑤研究協力者（松本泰丈）は、研究成果を『国文学解釈と鑑賞』に発表した（雑誌論文参照）。

⑥研究協力者（松本泰丈）は、これまでの研究成果を白馬言語研究会および海山言語研究会において口頭発表した（学会発表参照）。

⑦研究代表者（田畑千秋）と研究協力者（松本泰丈）は、古い形の奄美語を記録するために、静岡県および神奈川県在住奄美出身古者を訪ねて調査をおこない、大きな成果をあげた。

⑧研究代表者（田畑千秋）は、奄美方言と沖縄本島方言を比較研究するため沖縄本島を調査し、大きな成果をあげた。

⑨研究代表者（田畑千秋）は、鹿児島在住奄美出身者を訪ねて、奄美語の保存状態などを調査し、大きな成果をあげた。

(3)2011 年度

①奄美諸方言に関する研究書・報告書、および内容類型学に関する論文等の読みあわせをおこなうとともに、研究代表者（田畑千秋）と研究協力者（松本泰丈）のこれまでの調査、報告、研究を相互点検して、現地調査の準備とした。

②研究代表者（田畑千秋）と研究協力者（松本泰丈）は、類型学研究会（於：京都大学）に出席して、理論的研鑽をふかめ、研究会メンバーと意見交換した。

③研究代表者（田畑千秋）と研究協力者（松本泰丈）は、月末金曜日の会（同志社大学）に出席して、理論的研鑽をふかめ、研究会メンバーと意見交換した。

④研究代表者（田畑千秋）と研究協力者（松本泰丈）は、徳之島において内容類型学的視座からの言語調査をおこなった。

⑤研究代表者（田畑千秋）は日本総合学会に招待され、内容類型学的視座から講演をおこなった（広島大学）

⑥研究代表者（田畑千秋）と研究協力者（松本泰丈）は、中日理論言語学研究会に招待されて、内容類型学的視座から講演をおこなった（同志社大学）。

⑦本プロジェクト研究の成果として、『奄美語研究ノート－内容類型学からみた奄美諸語－』（全115頁）を公刊し、世話になった方々および関係諸機関、研究者に報告した。

所収論文は、「名瀬方言の格標識」(田畑)、「奄美語の表現」(田畑)、「方言はなしことばと文構造のタイプ」(松本)、「内容類型学と琉球方言」(松本)、「日本語の特徴のとりだしのために」(松本)、「琉球方言と古代日本語」(松本)である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

- ①田畑千秋、名瀬方言の格標示、奄美語研究ノート 査読無、1巻、2012、47-81
- ②田畑千秋、奄美語の表現、奄美語研究ノート、査読無、1巻、2012、82頁~100頁
- ③松本泰丈、方言はなしことばと文構造のタイプ、奄美語研究ノート、査読無、1巻、2012、7-14
- ④松本泰丈、内容類型学と琉球方言、奄美語研究ノート 査読無、1巻、2012、15-29
- ⑤松本泰丈、日本語の特徴のとりだしのために、奄美語研究ノート 査読無、1巻、2012年、30-40
- ⑥松本泰丈、琉球方言と古代日本語、奄美語研究ノート、査読無、1巻、2012、41-46
- ⑦松本泰丈、さまざまな〈膠着〉、類型学研究、査読無、3巻、2011、105-125
- ⑧松本泰丈、これからの漢字・漢語、国文学解釈と鑑賞、査読無、76巻-1、2011、6-14
- ⑨松本泰丈、奄美方言研究からーウチからの研究を中心にー、国文学解釈と鑑賞、査読無、75巻-1、2010、155-163

〔学会発表〕(計15件)

- ①田畑千秋、奄美語の主語・述語・補語、日本総合学会、2011.7.30、広島大学
- ②田畑千秋、奄美・名瀬方言の格標示、中日理論言語学会、2011.7.3、同志社大学
- ③松本泰丈、内容類型学と琉球方言、中日理論言語学会、2011.7.3、同志社大学
- ④松本泰丈、二重格現象をめぐって、海山言語学会、2010.10.2、静岡県伊東市
- ⑤松本泰丈、さまざまな膠着、白馬日本語研究会、2010.8.18、長野県軽井沢市
- ⑥松本泰丈、旧連用形の動詞生と名詞性から、海山言語学会、2010.6.19、静岡県伊東市
- ⑦松本泰丈、琉球方言の文法、海山言語学会、2010.5.8、静岡県伊東市
- ⑧田畑千秋、奄美語の重要性、鹿児島地域文化創造事業、2010.3.6、鹿児島県龍郷町体育文化センター
- ⑨田畑千秋、奄美諸島の歌と言葉の存在価値、鹿児島地域文化創造事業、2010.1.31、鹿児島県徳之島生涯学習センター
- ⑩松本泰丈、方言はなしことばと文構造のタ

イブ、日本課程講演会、東京外国語大学

⑪田畑千秋、奄美大島名瀬方言の主語・述語・そして補語2、類型学研究会、2009.11.21、京都大学図書館

⑫松本泰丈、世界言語のなかの奄美語の存在価値、奄美市名瀬公民館文化講演会、2009.9.5、鹿児島県奄美市名瀬公民館

⑬田畑千秋、シマユムタの保存と活用、奄美市名瀬公民館文化講演会、2009.9.5、鹿児島県奄美市名瀬公民館

⑭松本泰丈、主体-客体表現と形態論的なしるしづけ、白馬日本語研究会、2009.8.18、長野県軽井沢市、

⑮田畑千秋、奄美語の主語・述語・そして補語1、類型学研究会、2009.8.2、京都大学人文科学研究所

〔図書〕(計1件)

田畑千秋・松本泰丈、自家版、奄美語研究ノートー内容類型学からみた奄美諸方言ー、2012、全115頁

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

田畑 千秋 (TABATA CHIAKI)

大分大学・教育福祉科学部・教授

研究者番号：60264321

(2)研究協力者

松本泰丈 (MATUMOTO HIROTAKE)

別府大学・文学部・教授

研究者番号：90082932